

銀 鈴

第 一 號

紫 英

○ 石 橋 沙 波

朽つる期は斯かれと秋の野に笑みぬ
燃えしがまゝにもくや紅蓼べにこゝろ

○ 柴 田 逝 秋

朝雨にひとり野路行く子が秋のさび
しき影や里の牧ぶえ

○ 狩 野 梅 南

かくて夜は更けぬ遠きに鐘鳴りぬ見
返る夢に啼くほととぎす

○ 山 本 静 子

幸あれな榮もあらせと西の空星澄む
夜毎君戀ひわぶる(人に)

○ 福 屋 杜 啼

遠鳴りて夕潮よせ來乗りいでよ魔の

笛吹いて夏へ彼方へ

供奉しつる藝の夏宮あつみやあなかしことる

健たけの手のあけまごはるゝ

○ 岡 碧 水

この世にみ袖かさねむよしもなし
戀のどこ幸天のみ國に
こゝやいと暫し黙思の境なれハート
の血潮しづかにめぐる

木屋無價珍

花の香は堂に満ちぬる宵の春小琴に
もらぐわがれもひ哉
露や葉に白玉なして香たかきうつる
は神と笑む若子かな

河野三生

平和とのぞみの色をもたらしわが
詩の領ぞかやき帯びぬ
歌はんに戀はんにかしこ我が身ぞと
筆にもはぢしはつ秋や風

増野紫星

岩がけに黒髪長う波よびてかほるも
よしや天つ星姫
花はいま神のれん手にうるはひて生
ひぬ咲き出ぬ蓮曉や春

厄川紫瀾

○ 内田 枯竹
たへがてにたざるかよわの子に重き
罪の石たび去にませし神

○ 前田 紫虹
夕榮の雲紫に空を織るいま興來の百
合のみ園や
春の神よそほひなりて花や花夕野し
づかに曳きませしみ裳

海のごと八重潮巻きて七彩や美しく
き詩は戀は湧くらむ
神の世か敷の星屑ひとつひとつ戀と
かややく天のみ誇り

中村 秋泉

○ 奇し夢を若葉にしのぶ星月夜久遠の
しらべ春潮と湧く
紫とさては赤きと野の映をたびしみ
歌にはこるわらんべ

福田 紫雲

○ よき君のみ歌さへびげて卯月夜を神へ
まわるも身のはこりなり

沈みては落ちてはそこに輝きぬ珠や
遠海我に似る珠
おのづから若きれもひか白菖蒲いぶ
くにあかき血もこもるなり

佐々木春濤

をさなきを神に恨みのはたとせやつ
ひにふさはぬ詩と知りし今
水やりて餌やりて低うさゝやけば鷓
鴒汝また呼ぶよ世の戀

○ 飯塚 雲水

春川をきよき手馴の掉さして遣るに
小舟のせばからぬ哉
白梅のかをるや窓に君待つと春のま
ろうど鶯來る(詩人に)

○ 立田 紅翠

み柩はつひの運命にとざしたりれん
座いまいを安くれはさむ
○ 山本 明星
幸うすうさびしう我は歌もなし闇の
世せちに神待たれぬる

あるは彩羽あるは小百合の花をもて
成りしよそほひ今歌に見よ
天の王のみ言かしこみ優姫が詩人我
に戀はたびたる
百合園の夢の犠牲にとれん神がみ手
になりたるわが生靈か
あやまちて詩の冠をよそほひし罪と
しいは君ゆるすべし

疲れては王者とよぶに力なし詩歌ま
たまた我遠ざかる
思ひ出の樂舞が夢をうら問ひぬ十九
は狂ふにふさはしき歳

○ 藏田 信子
渴きては物に狂ふがわが靈の何を夜
ごとの胸の高鳴
眠りてはれちてははかな微草のれこ
らむすべを春にまごひし
往く春を淋しわが頬にみ手かさむお
なじ愁ひの姉もいまさば
戀にます女神の春攻うすものよみ袖

○ 福田 紫雲

の彩と櫻ばな咲く

○ 河野翠 漱

野をめぐる夏神白きかつぎして泉よりこそ影はうごかむ

詩歌なり戀也、得つる身のひとつ碎けし星のいく世經しもの

姉よびて夏野まろぶに興もありしろも白合枕りまくらいざやわ手たべ

八重潮の潮路分けゆく珠と珠あたま青藻が

くれに夢も追ひつゝ

美しくしきるり瑠璃戸こがね黄金の花さゝげぐま供奉

のみ姉が肩に倚りもく

▲ 會 告

●茲に本誌を發行す、固より寸少零碎なる一雑誌なり。新涼會の詠草は爾今本誌に發表せむ、特に會友諸子の奮發をのぞむ。

●本誌は隔月發行にして、本誌發行の月に限り金五錢の會費を請求す。本月分は速かに御送付を請ふ(郵券代用不苦)

●本誌は次號に發表の目的を以て左の詠題を募る、會友諸子奮て御投稿有之度し。

◎短歌題 袖

但一人五首以下十月十五日限

●次號には會友某子の歌評及會友の消息を載すべし、投稿は小説、論文其他不厭と雖も可成短篇なるを可とす。

明治三十七年九月十日印刷

全 三十七年九月二十日發行

島根縣邑智郡田所村大字
下田所七百三十二番地

編輯兼 發行人 河野岩雄

全縣全郡川本村大字川本
五百三十八番地

印刷人 原 八太郎

全縣全郡田所村大字下田所

發行所 新涼會

